

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24700897

研究課題名(和文) 教員志望学生のカリキュラム開発力量に資するワークブックの開発

研究課題名(英文) A Study of Creating a Workbook to Cultivate Preservice Teachers' Capacity for Curriculum Development

研究代表者

深見 俊崇 (Fukami, Toshitaka)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：80510502

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：教員志望学生のカリキュラム開発力量について考察するため、現職教員5名(小学校3名・中学校2名)に対してこれまでのカリキュラム開発に関するインタビュー調査を実施した。その結果、「地域を基盤とした活動」「新たに直面した状況からの実践の創造」が共通に確認された。これらの内容を踏まえて、2013・2014年度に「カリキュラム開発プロジェクト」を立ち上げ、「松江市の教材化」「タブレット端末を用いた新たな実践の創造」に取り組んだ(両年度とも4名)。本プロジェクトを通して、いずれの学生もカリキュラム開発力量の向上につながったことが確認された。これらの取り組みを基にワークブックを執筆・完成させた。

研究成果の概要(英文)：Considering the capacity for curriculum development, interviews for five teachers (three elementary and two junior high school teachers) were conducted. The Results showed that all participants wished to relate the curriculum to the school environment and local characteristics. Teachers who worked in public schools had to be transferred every few years and, therefore they gained learning opportunities when they made a new effort at new school. Based on these results, "curriculum development project" was launched in 2013 and 2014 school year. Four preservice teachers in each year participated in the project. They tried to design the integrated learning in Matsue city (location-based activities) and create lesson plans to use tablet devices (challenging a new situation). In this project, their capacities for curriculum development were increased. In reflection of the project, "The workbook to cultivate preservice teachers' capacity for curriculum development" completed.

研究分野：教師教育

キーワード：カリキュラム開発 教員志望学生 力量形成 教育課程論 総合的な学習の時間 PBL

## 1. 研究開始当初の背景

カリキュラム開発とは、(1)目的の分析に基づき、(2)プログラムやイベントをデザインし、(3)関連する一連の活動を実施し、(4)これらのプロセスを評価する、という総合的な営みである (Wiles and Bondi 2014)。目指すべき目的に基づき、それに必要とされる活動と評価をデザインする創造的な営みがカリキュラム開発である。

日本においては、個々の教師が主体的判断に基づき、カリキュラムを創造することに関心が向けられず、実践としても重視されてこなかった。その背景として、各教科等の目標・内容が学習指導要領に規定されており、授業では、学習指導要領に準拠した教科書の使用が義務づけられていることが挙げられる。すなわち、学習指導要領・教科書中心の授業スタイルが、個々の教師の主体的判断に基づくカリキュラム創造の意欲を弱めることにつながってきたのである (天野 1999)。それゆえ、村川 (2005) が指摘する通り、一部の学校を除いて、カリキュラムを各学校において、「つくり、動かし、変える」という発想さえ希薄であった。

しかし、総合的な学習の時間の導入や各教科における情報教育・ICT活用の推進により、それぞれの教師がカリキュラム開発を担わねばならない状況が到来している。中央教育審議会 (2005) の『初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について (答申)』においても、「校長や教員等が学習指導要領や教育課程についての理解を深め、教育課程の開発や経営 (カリキュラム・マネジメント) に関する能力を養うことが極めて重要である」と指摘されるようになった。

このような動向の中で、将来教師になる教員志望学生も、カリキュラム開発に関する力量形成が求められる。しかし、教員養成段階においては、教員志望学生がカリキュラム開発に触れる機会すら十分保障されていない。「教育課程の意義及び編成の方法」の講義 (教育課程論、カリキュラム論等)、大学や教育実習における模擬授業や授業実践はカリキュラム開発の一端を担うとは言え、それを主眼に置いたものとは言えない。

## 2. 研究の目的

以上のことから、教員養成段階において、教員志望学生のカリキュラム開発に関する力量形成の機会を保障していくことが求められている。そこで、本研究は、教員志望学生のカリキュラム開発力量に資するワークブックの開発に着手し、その公開・普及を目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、以下に示す5つの研究方法に取り組んだ。

(1) 教員養成段階においてカリキュラム開発の一端を担う「教育課程の意義及び編成の方法」の講義の実態を調査するため、Web上に公開されているシラバスを収集し、テキスト分析で講義内容やテーマの傾向性を把握する。

(2) カリキュラム研究に携わっており、「教育課程の意義及び編成の方法」の講義を担当している大学教員に対して、講義で目指す方向性と講義全体のデザインについてインタビュー調査を実施する。合わせて、教員養成段階で教員志望学生に求められるカリキュラム開発力量とその力量形成に関する手立てについても聞き取りを行う。

(3) 現職教員に対してインタビュー調査を実施し、教職経験を通して、カリキュラム開発力量をどのような場面でいかに形成してきたかを明らかにしていく。

(4) (2) と (3) の内容と先行研究に基づいて、カリキュラム開発力量を評価する観点を設定する。その内容を具現化する「カリキュラム開発プロジェクト」を構想し、実践する。「カリキュラム開発プロジェクト」に参加した教員志望学生に対して事前・事後の調査を行い、カリキュラム開発力量の形成について明らかにしていく。

(5) これらの成果を踏まえて、ワークブック『カリキュラム開発力量を高めるために教員志望学生向けワークブック』を執筆する。

## 4. 研究成果

本研究の成果としては、以下の5点が挙げられる。

(1) 「教育課程の意義及び編成の方法」に関するシラバス調査の結果、「学習指導・教科の構造」、「教育課程の編成原理」、「学習指導要領の変遷」、「学校現場に関すること (教師・授業・事例など)」、「基礎知識」、「今日の課題」に整理できた。「学校現場に関すること」も扱われているが、「基礎知識」、「教育課程の編成原理」、「学習指導・教科の構造」、「学習指導要領の変遷」と概念的なものが中心となっていた。これらの内容については、「教育課程論」に関するテキストとして編纂されているものとほぼ重なる内容である。

(2) 大学教員2名 (ベテラン A・若手 B) に対するインタビュー調査の結果、講義を通して教員志望学生自身の被教育体験に対して理論的・法的裏付けを確認するなど、「学

問的理解」をいずれの教員も重視していた。それに対して、いずれの教員もカリキュラム開発に関する内容については、教員志望学生に対する指導することの難しさを語っていた(A:「カリキュラムは、実践的・創造的営みであるというカリキュラムマインドをもつことは難しい」、B:「実感が伴わない(中略)自分の姿とつながらない」)。

仮に、教員養成段階でカリキュラム開発に関する力量を形成する機会を設けるとすれば何が必要かとの問いから、具体的な実践や教材を揃えること(A)、学校現場での教員の取り組みを中期的に参観しながら関わっていくことの重要性(B)が確認された。

(3) 現職教員(小学校3名、中学校2名)に対するインタビュー調査の結果、地域に足を運ぶこと、地域に関する様々な情報を収集すること、それを活かしたカリキュラム開発を行うといった実践である。例えば、ある小学校教師は、理科や総合的な学習の時間において、地域に出かける活動を企画し、公民館とタイアップして実践を展開した経験を語っていた。

もう1点共通して確認できたのは、赴任校の実態や教育課題に対応する必要性からカリキュラム開発に取り組んでいたことである。例えば、ある中学校教師は、総合的な学習の時間を自らが企画・運営する機会を得た中学校3年間のデザインを「地域・社会・未来」という枠組みを新たに設定し、生徒と地域や他者とをつなげる実践に取り組んだ。

つまり、「地域を基盤とした活動」「新たに直面した状況からの実践の創造」がカリキュラム開発力量の契機となっていたと言える。

(4)(2)と(3)の内容を踏まえて、15項目のカリキュラム開発力量に関する評価観点を導き出した(カリキュラム開発の理解、地域を教材化するための情報収集、学校全体をイメージしたデザインなど)。

そして、2013年度・2014年度に「カリキュラム開発プロジェクト」を立ち上げ、いずれの年度も4名の学生がプロジェクトに参加した(2013年度:2013年12月~2014年3月、2014年度:2014年7月~2015年3月<8月~11月までは夏季休業並びに教育実習のため休止>)。プロジェクトの内容としては、「松江市の教材化」(地域を基盤とした活動)、「タブレット端末を用いた新たな実践の開発」(新たに直面した状況からの実践の創造)を設定した。前者については、ある仮想の学校における4年間トータルの総合的な学習の時間に関する地域を基盤にしたカリキュラム開発を行うものであった。後者については、2013年度については前者との一貫性がなかったが、2014年度については、前者で設定したプランの一部でタブレット端末を活用した実践例を構想させた。

2013年度・2014年度の「カリキュラム開

発プロジェクト」を通して、8名全員がカリキュラム開発力量に関する評価観点のうちかなりの部分で上昇が認められた。それゆえ、本プロジェクトを通して教員志望学生のカリキュラム開発力量の向上につながることが確認された。

(5)(4)から本研究で取り組んだ「カリキュラム開発プロジェクト」の内容が教員志望学生のカリキュラム開発力量の向上に資することが確認されたことから、その内容に基づいてワークブックを執筆した。

ワークブックの内容として、カリキュラム開発が求められる背景を概説した上で、現職教員のカリキュラム開発に携わった経験も参照しながら、「地域を基盤とした活動」「新たに直面した状況からの実践の創造」を踏まえたワークを盛り込んだ。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1. 深見俊崇(2013)4年間の教育実習プログラムを通しての教員志望学生の資質能力の変化:島根大学教育学部の事例.島根大学教育学部紀要第47号,p.1-6(査読無)
2. 深見俊崇(2013)実習経験が保育者志望学生の意思決定に与える影響.大阪市立大学教育学会教育学論集第2号,p.31-39(査読有)

[学会発表](計11件)

1. 深見俊崇(2014)教育実習プログラムにおける自己評価の経年変化.平成26年度日本教育大学協会研究集会(2014年10月18日,仙台国際センター 宮城県仙台市)
2. 深見俊崇・木原俊行・小柳和喜雄・森久佳・島田希・廣瀬真琴・宮橋小百合(2014)教師の感情に関する研究動向.日本教育方法学会第50回大会(2014年10月11日,広島大学 広島県東広島市)
3. 深見俊崇(2014)カリキュラム開発プログラムを通しての教員志望学生の変容.日本教育工学会第30回大会(2014年9月19日,岐阜大学 岐阜県岐阜市)
4. 深見俊崇・松山由美子・中村恵・佐藤朝美・奥林泰一郎・松河秀哉・堀田博史(2014)テクノロジーの進歩に伴う保育におけるメディア活用の再検討.日本保育学会第67回大会(2014年5月17日,大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学 大阪府大阪市)

5. 深見俊崇・栢野彰秀・作野広和・大谷みどり(2013)教員志望学生の授業観察力量の向上を目指した初年次教育実習プログラムの成果と課題．平成 25 年度日本教育大学協会研究集会(2013年10月5日,札幌全日空ホテル 北海道札幌市)
6. 深見俊崇(2013)教員志望学生のカリキュラム開発力量に資するプログラムの構想．日本教育工学会第 29 回大会(2013年9月22日,秋田大学 秋田県秋田市)
7. Hisayoshi Mori, Toshitaka Fukami and Tetsuya Takatani (2013) The characteristics of the image of the teaching profession held by elementary school teachers in Japan, focusing on their view of their professional development. ISATT2013 Conference (2013年7月3日, Ghent University Belgium)
8. 深見俊崇(2013)教師の実践イメージに関する経年比較研究．日本教育工学会研究会(2013年5月18日,長崎大学 長崎県長崎市)
9. 深見俊崇・作野広和・栢野彰秀・大谷みどり・村上幸人(2012)初年次教育実習プログラムの成果と課題—島根大学教育学部の事例—．日本教育大学協会・教育実習研究部門第 26 回研究協議会(2012年10月5日,鹿児島大学 鹿児島県・鹿児島市)
10. 深見俊崇(2012)4年間の教育実習プログラムを通しての教員志望学生の資質能力の変化．日本教育工学会第 28 回大会(2012年9月17日,長崎大学 長崎県・長崎市)
11. 深見俊崇(2012)わが国における教職科目「教育課程論」の現状と課題．日本教育工学会第 28 回大会(2012年9月17日,長崎大学 長崎県・長崎市)

〔図書〕(計6件)

1. 稲垣忠・鈴木克明(編著)深見俊崇・他7名(2014)『授業設計マニュアル Ver.2 教師のためのインストラクショナルデザイン』北大路書房.(担当頁:pp. 39-49, pp. 147-178)
2. 益川弘如・望月俊男(編訳)深見俊崇・他12名(2014)『21世紀型スキル: 学びと評価の新たなかたち』北大路書房.(担当頁: pp. 159-204)
3. 堀田博史・松河秀哉・森田健宏(編著)深見俊崇・他5名(2013)『保育・幼児教育

に携わる人の情報処理テキスト 幼稚園・保育所の保育実践とメディアの活用』みるめ書房.(担当頁: pp. 122-144, 156-162)

4. 犬塚文雄(編著)深見俊崇・他11名(2013)『特別活動論』一藝社(担当頁: pp.34-46)
5. 稲垣忠(編訳)深見俊崇・他6名(2012)『デジタル社会の学びのかたち—教育とテクノロジーの再考—』北大路書房.(担当頁: pp.167-201)
6. 永岡慶三・植野真臣・山内祐平(編著)深見俊崇・他11名(2012)『教育工学における学習評価』ミネルヴァ書房.(担当頁: pp.174-188)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

深見俊崇 (FUKAMI, Toshitaka)  
 島根大学・教育学部・准教授  
 研究者番号: 80510502